

敗戦直後の長野県における丸山眞男の講演・講義

——アーカイブ資料にみられる「悔恨共同体」形成の位相——

川口雄一

はじめに

本稿は、二〇一七年一月三〇日～二月七日の九日間（移動日をふくむ）にわたる長野県での出張調査の報告である。本出張における用務全体の概要は、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター編集・発行『20世紀日本における知識人と教養——丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用（全事業報告書）』（二〇一七年三月、二四五―二四六頁）、および本『報告』第十二号（二〇一七年三月、八頁）に記載されている^①。本稿はそのうち、以下の資料調査の報告である^②。

第一は、一九四六年夏に、丸山が下伊那郡川路村（当時）で一般向けの講義を行ったという情報の正否に関する調査である。この情報は、塩原光氏（九州大学大学院博士後期課程）より寄せられた。その

根拠は、野沢敏治「健康な常識」が学問を支える——内田義彦「われら何を為すべきか——コロナプスの小さな卵の話」、『文化会議』第一号、一九四六年一月二〇日印刷^③にあり、またその情報を裏づける原資料が飯田市立中央図書館に所蔵されているとのことであった。

第二は、一九四八年夏に、丸山が長野県で行った二つの講演の背景事情の調査である。『丸山眞男集別集』第一巻（東京女子大学丸山眞男文庫編、岩波書店、二〇一四年。以下『別集』と略記）に翻刻した講演記録および自筆原稿「政治嫌悪・無関心と独裁政治」・「民主主義政治と制度」はその内容である。両講演とも、主催者や開催地など不明な点が多かった。前者の原資料には演題も記されていない。ただし『別集』第一巻の平石直昭「解説」は、つぎのような推定を行っている。——丸山の言葉にもとづくならば、文部省主導の教員再教育講習会での講演であり、信濃教育会主催の講演会ではないらしい。また、

同時期の書簡より、須坂における講演ではないか、というものである。⁴この推定をふまえつつ、関連する情報を信濃教育博物館または県立長野図書館にて調査することが求められていた。

以上の情報は、『丸山眞男集』別巻の「年譜」にも記載がない。⁵ところで、周知のように、長野県は丸山にとって特別な意味をもつ地であった。まず、丸山眞男の父・丸山幹治（侃堂）の出身地が松代（埴科郡清野村）であった。侃堂は一八歳のとき家を飛び出し勤当されたが、のちに弟の取りなしにより復縁している。⁶丸山眞男自身は大阪で生まれ、幼少期を大阪、のちに東京で過ごしたが、本籍は長野県松代であり、後年、「私の郷里は信州です」とも述べている。⁷

また、丸山ゆかり夫人（旧姓・小山）は、東京市小石川区の生れだが、実家が長野県更級郡青木島村にあった。⁸丸山の結婚は一九四四年であったから、後述のように本稿が対象とする時期には、更級郡の小山家も彼にとって身近なものであったと考えられる。そのほかに、志賀高原の発哺温泉「天狗の湯」が丸山の定宿であったという記事もある。⁹これらの事実にも、当地での丸山の活動には特別な意味があったことが窺われる。

他方、本調査によって同時に確認できたのは、敗戦直後の講演・講義活動が丸山単独のものではなかったという点である。すなわち、丸山だけでなく他の知識人も同時期、当地に招かれ講演活動を行っていた。そうした背景には、一方、現地の人びと（主催者）の熱心な学問的意欲があったとともに、他方では彼らに招かれた知識人たちにも「啓

蒙」への意欲があった。本稿では、丸山の評伝的事実の考証とともに、知識人たちの講演・講義活動にも目を向ける。本稿が対象とするこうした出来事は、「悔恨共同体の形成」という丸山自身の時代経験と思想史認識に関わる。

丸山は、講演「近代日本の知識人」（一九七七年一〇月）のなかで、横断的なコミュニケーションが成り立たない近代日本の知識人の間にも「ひとつの知的共同体を構成している」という意識が「高まった時期が三度あったとし、三度めの時期に敗戦直後をあげている。¹⁰戦争経験を経て、「一体、知識人としてのこれまでのあり方はあれでよかったのだろうか。何か過去の根本的な反省に立った新しい出直しが必要なのではないか、という共通の感情」の上に立った「悔恨共同体」がそれである。¹¹この「悔恨共同体」の概念は、現在では戦後思想史研究を構成する一つのモチーフとなった。¹²

講演「一九五〇年前後の平和問題」（一九七七年五月）で丸山は、「悔恨共同体」の代表的な形態の一つを、一九四〇年代末に結成された平和問題話会に見ている。¹³本稿が対象とする主な時期は、この平和問題話会結成の前段階にあたる。とくに、一九四七、四八年を中心に信濃教育会が推進した知識人招聘による講演会・講習会の記録は、当時の知識人たちの関心の所在を示すものであり、丸山の「悔恨共同体」の概念を客観的に検証していく上で重要な資料である。

以上の点から、本稿は、評伝的事実として敗戦直後の丸山の講演・講義の活動の軌跡を確認・検証するとともに、そうした講演・講義の

活動がどのような関心を抱いた、どういった知識人たちと共同で展開されたものだったかを示すものである。そのことよって、本稿を丸山という「悔恨共同体」の研究に向けた予備的考察に位置づけたい。¹⁴⁾

I 一九四六年川路村における講義（？）

(1) 一九四六年の丸山眞男

一九四六年九月三日に、丸山が川路村で講義を行う計画があったことは、後述する飯田市立中央図書館所蔵資料によって確認できる。それによれば丸山は、「法の意義（日本近代政治思想史）」と題する講義を、川島武宜と同じ日に行う予定であった。

結論からいえば、当該資料は、開催予告であって、実際この通りに開催されたかどうか確証は得られなかった。加えて、当該資料には、「第四回、第五回は講師順序若干変更あるべし」との断り書きがあった（丸山は第五回講師）、確定した情報とはいいがたい。なお、この講義は、後述する諸資料を総合すると、農村文化協会長野県支部が主導した夏期成人講座であったと推定されるが、この講座に関する記事を掲載した下伊那連合青年団編集・発行『団報』創刊号（一九四六年二月）に、丸山の名は確認できなかった。したがって丸山の講義が行われたとの確言はできないのである。

しかし仮に実現されなかった講義だとしても、当初、丸山に講義を

行う意思があったことは確実だといえるのではないか。現在のところ、丸山文庫所蔵資料のなかに「法の意義」と題した草稿類を確認することはできない。しかし非常に旺盛であった一九四六年の丸山の講演・講義その他の活動を一覧することは、「法の意義（日本近代政治思想史）」というテーマで予定していた講義内容を類推する上で無意味ではないと思われる。それは下記のようなものであった（『丸山眞男集』別巻・新訂増補「年譜」五一頁より摘記の上、一部を補足）。

二月 青年文化会議発足（メンバーは後述）。庶民大学三島教室にて「十九世紀以降欧洲社会思想史」講義開講¹⁵⁾。東京大学憲法研究委員会発足（メンバーは、宮沢俊義（委員長）・高木八尺・岡義武・末弘厳太郎・和辻哲郎・我妻栄・横田喜三郎・尾高朝雄・大内兵衛・矢内原忠雄・大河内一男ほか）。二十世紀研究所（所長 清水幾太郎）に参加。

五月 「超国家主義の論理と心理」発表。

九月 文部省人文科学委員会第一回総会に出席。

一〇月 木村健康との対談「学生の表情」発表。「明治国家の思想」講演。

夏、食糧事情を考えて、身重の妻が母藍、妹光子の疎開している。た小山家（更級郡）に出産のためおもむく。

このうち、庶民大学三島教室での講義活動に着目したい。「十九世紀以降欧洲社会思想史——特に独逸を中心として」の講義原稿（資料番号469）に、大陸ヨーロッパにおける宗教戦争の帰結としての「主権

の絶対性→形式的絶対性(法的強制力)という記述のある一枚のメモがふくまれているからである。¹⁶⁾ 少なくともこの原稿は、論文「超国家主義の論理と心理」で展開された「中性国家(Ein neutraler Staat)」の概念と対応する。すなわち、国家は「真理とか道徳とかの内容的価値に関して中立的立場をとり、そうした価値の選択と判断はもっぱら他の社会的集団(例えば教会)乃至は個人の良心に委ね、国家主権の基礎をば、かかる内容的価値から捨象された純粹に形式的な法機構の上に置いている」という近代法の意義を記述したものである。¹⁷⁾ 同時期の資料のなかで「法の意義」という主題に関わる丸山の考えをもっとも現わすのはこの点ではないかと思われる。

(2) 一九四六年の川路村における講義活動

つぎに、丸山の名が記されたものをふくむ関連の資料群を示し、筆者の推定の根拠を詳述するとともに、丸山の講義が他の知識人たちと共同で進められた運動の中に位置づけられていたことを示す。

「青年団関係雑件綴 昭和二十一年度」(青年団資料川路文書41)がそれである。当該綴は、川路青年団総務部から寄贈を受けたものだという。さまざまな案件の資料を紐で綴じたもので、同資料を収納している封筒に整理担当者が細目を書き込んでいる。その中の「夏季成人文化講座」日程、要項他」としている部分が、調査対象の資料である。全七枚からなるものと推定され、つぎの三組に区別できると思われる。

- ① 「郡青文第七号」(昭和二年八月七日発行)
 - ② 「川青発号外」(昭和二年八月一日発行)
 - ③ 「川農号外」(昭和二年八月一日発行)
- 以下では個々の資料の詳細を示す。

① 「郡青文第七号」(昭和二年八月七日発行)

七枚の綴りのうち最初の二枚は一組、下伊那郡連合青年団文化部発行の「郡青文第七号」と推定される。一枚は「成人文化講座」参加要請を記したヘッドレター、もう一枚は講座の日程表である(両者の紙の素材は異なる)。後者に丸山の名が記されている。

まずヘッドレターは、宛名を各村青年団長・同文化部長とし、件名に「成人文化講座参加依頼の件」と記している文書である。用件は以下の通り(読みやすさを考慮して句読点を加除した)。

「今回夏季休暇を利用して、農文協(農村文化協会)の御配慮に依り、別紙の通り文化講座が開催されます。貴団々員多数参加願ひ度いのでありますが、^カ時下多忙期であります上、^カ貴下より団員有志各位に参加方御配慮下され度く(…)」

下伊那郡連合青年団文化部が関与し、農文協が推進しているというこの「成人文化講座」の実施は、『団報』の記事(後述)とある程度合致する。

つぎに、日程表である。第二回以降の講義日程を記した一覧表で、会場はすべて川路国民学校。この日程表を示すと以下の通り。

第二回 八月二三日 午前八時より

「農村と近代精神」 杉森久英（文芸評論家）

「農村に於ける科学に付て」 柳田種正^{（為正カ）}（女子高師教授）

第三回 八月二〇日 午前八時より

「自然科学実験の意義」 川田進一郎（東京帝大助教授）

「解放の文学（農村文化）」 野間弘^{（弘）}（作家）

第四回 八月二七日 午前八時より

「土地拡張と改良」 牧隆泰（日本農業研究所）

「日本科学の反省」 武谷三男（理化学研究所員）

第五回 九月三日 午前八時より

「日本農業と土地問題」 川島武宜（東京帝大教授）

「法の意義（日本近代政治思想史）」 丸山眞男（東大助教授）

このあとにつづけて、資料末尾に「第四回、第五回は講師順序若干変更あるべし」という記述がある。

② 「川青発号外」（昭和二十二年八月一九日発行）

つぎに綴じられているのは「川青発号外」（昭和二十二年八月一九日発行、計一枚）である。資料タイトル下部に、「主催 川路青年団／〔川路〕女子青年団／〔川路〕農村建設連盟」と記入されているが、これが当該資料の発行者と推定される。川路村で「夏期文化講座」を八月二〇日（したがって文書発行日の翌日）に開講する旨の案内である。その科目と講師は以下の通り。

「農家経済と土地問題」 大谷省三（日本農業研究所所員）

「農産加工ノ将来」 川田新一郎^{（新一郎）}（東京帝国大学助教授）

「世界文学ヨリ見たル近世人間性ニ付キ」 姉崎正治（学習院教授）

八月二〇日は、前記「郡青文第七号」の開催予定日と重複するが、

川田以外は講師名が重ならないので、「郡青文第七号」の開催案内を繰り返し伝える文書ではないのではないか。

当該資料は、「本日（八月一九日）郡農業会より話があり左記講師が東京より来る^{（カ）}二十日来村講演致す事となりました（…）」（原文カナ）と説明している。前記『団報』には、農文協だけでなく、郡農業会にも後援したという記載があるが、両団体が個別に文化講座を企画したところ日程が重なってしまったのか、もともと共同で企画しており「郡青文第七号」回覧後に生じた変更を本文書が伝えているのかはハッキリしない。なお、「郡青文第七号」の日程表は、午前八時開講としているのに対し、当該講座は午後一時開講であり、どちらの会場も川路国民学校であることから、同日に両講座を受けることは一応可能である。

③ 「川農号外」（昭和二十二年八月一日発行）

最後に、「川農号外」（昭和二十二年八月一日発行、計四枚）である。発行者は川路村農業会。川路青年団長・今村豊治に宛てた文書で、「夏期成人文化講座開催に就て」という件名が示されている。このヘッドレターにつづく三枚（順序が前後している）が「夏期成人文化講座開設要項」として、当該講座の趣旨、さらに講義日程等を説明している。

当該資料の日程表は、前記「郡青文第七号」のそれと近似しており、八月〜九月に全五回の日程で開講、会場は川路国民学校、開始時刻が午前八時という点は重なる。当該資料の日程表は下記の通りである。

第一回 八月五日（月）

「農業経営の諸問題」 大谷省三郎^(マ)（日本農業研究所員）

「日本経済の再建^(カ)上農村人の使命」 内田義彦（経済評論家）

第二回 八月二二日（月）

「家庭に於ける婦人の地位」 門上千枝子（法律家）

「民主主義と人間性の確立」 未定

第三回 八月一九日（月）

「土地拡張と改良問題」 牧隆泰（日本農業研究所員）

「戦争原因より見たる日本経済の性格」 安藤良雄（東大経済学

部嘱託）

第四回 八月二六日（月）

「日本科学の反省」 武谷三男（理化学研究所員）

「開放^(解)の農村文学」 野間宏（作家）

第五回 九月二日（月）

「日本農業と土地問題」 川島武宣^(宣)（東京帝大教授）

「農民意識と東洋社会」 磯田進（東大法科助手^(カ)）

以上のように、開催日と講師の詳細を見てみると、「郡青文第七号」と類似しているが、細部にズレがあり、ここには丸山の名はない。「郡青文第七号」のほうが後に発行されているので、両者が同一趣旨の企

画とすれば、本文書の修正版が先の「郡青文第七号」ということになる。

当該講座の主催団体については、つぎのような説明がある。「県農業会及び農業会下伊那支部主催にて、別紙要項に依り川路村国民学校に於て、夏期成人文化講座が開講されます。講師の方々ハ中央部に於て各種農村問題と研究されて居る権威ある方々であります」。したがって、下伊那郡連合青年団文化部および農文協を主体とする「郡青文第七号」に記載の講座とは合致しない。

以上の三つの文書がすべて開催予告であるのにたいして、結果を伝える資料に前記『団報』がある。同誌掲載の一九四六年度事業概要のうち、「文化部」欄に記載されている関連する情報は、以下にとどまるものであった。

「八月七日 農村文化協会、郡農業会主催の成人文化講座に対し
て後援

農村向文化叢書 日本農村の生活意識 川島武宣^(宣)著

解放の文学 野間^(宏) 完著

二冊を推薦読書用として各単位団に送附。」

この記述は、八月七日に行った講座を後援、または後援のため二冊の関連書を送付したことを示す⁽¹⁸⁾。同日に講座を行ったとすれば、前掲のすべての回覧文書と食い違うし、これが関連書の送付を伝える記事にすぎないとすれば、講座開催の記事自体が存在しないことになる。

そして、ここには丸山の名が記されておらず、いつ、どのような趣旨の「成人文化講座」で丸山が話をしたのか、その記録を確認することができないのである。¹⁹⁾

しかし、「夏期成人文化講座」と題してほぼ同じ日程、同じ場所で開催することを示す前掲の三つの文書の間にもどのような関係性が成り立つのかを一応まとめておこう。現在与えられている資料から推量できることは、おおよそ以下の通りである。

①上記三件の文化講座は、主催ないし推進団体が微妙に異なり、開催日時にもズレがあることから、この通りすべて行われたという可能性。つまり丸山は、「郡青文第七号」に記載の通り講義を行った。

②「郡青文第七号」と「川農号外」とは近似しているため、どちらかが片方の情報を更新した資料という可能性。だとすれば、発行日によって「郡青文第七号」の方が後に発行された。つまり丸山は、「郡青文第七号」に記載の通り講義を行った。

しかし、どちらの推量も、「郡青文第七号」に記されている「第四回、第五回は講師順序若干変更あるべし」という断り書きによって、丸山の講義を確認するものではない。したがってここに、③丸山の講義自体は実現しなかったという可能性が加わる。しかも丸山は、この頃の長野県に関して回想しているが、下伊那郡での講演・講義を示唆するものはまったくない。²⁰⁾

(3) 講師陣としての青年文化会議とその「啓蒙」活動

上述の講義活動に関与した、丸山をふくむ青年知識人の主要な学友は、青年文化会議のメンバーであった。『大学新聞』一九四六年二月一日付に青年文化会議発足の記事(同会の「宣言」)が掲載されているが、ここに名を連ねているのは、川島武宜(議長)、中村哲(副議長)、瓜生忠夫(書記長)、青山敏夫、小口偉一、内田義彦、倉橋文雄、嘉門安雄、杉浦明平、桜井恒次、土屋清、関島久雄、野間宏、豊田利幸、柳田為正、丸山眞男。そのほか、同会議発行の『文化会議』創刊号(一九四六年一月、登録番号M000152)巻末掲載の名簿にはつぎの人物が名を連ねている。花森安治、松村達雄、高田瑞穂、杉森久英、団藤重光、湯川和夫、大山聡、林純一、大友福夫、友野代三、町田甲一、山内一夫、佐藤功、下村正夫、猪股庄八、推野力、澤開進、辻清明、内田力蔵、長谷川泉。実際、このうち、川島、内田、野間、柳田、杉森、丸山の名が前記の講義日程表でも掲げられている。²¹⁾

青年文化会議の動向を伝える『大学新聞』一九四六年四月一日付によれば、同会議は、「農村班」「文学班」「第一次大戦後の独逸研究班」の三班を内部に設け、三班を横断する「総合研究発表会」を毎週土曜日に開催することを決定した。各班所属の人物の詳細は不明。²²⁾ 同記事によれば、長野県各地での啓蒙活動を進めた農村班のメンバーとして、川島、古島敏雄、関島、中村、野間、桜井の名が挙がっている。

札幌大学図書館内の川島武宜文庫には、この頃に書かれたと思われる未投函の葉書がある（資料番号D50）。青年文化会議同人が参加した座談「新学問論」を掲載する『潮流』第二巻第一号（吉田書房、一九四七年一月）に挟まれていたものである。⁽²³⁾そこに示された川島の以下のような認識は、敗戦直後の「啓蒙」活動に熱意を傾けた青年知識人の農村理解の一端が窺われるものである。

「〔…〕山形も案外雲が少いです。しかし昨日の如きは吹雪で思はず道が迷いさうだったです。当地で多くの問題が提起されました。反動勢力のイデオロギー的、物的基礎としての東北の農村は確かに鞏固です。あの徳川三百年、或はそれ以前に於ても隠然たる外的勢力を形成した土地（南部藩）、現在に於ても、明治以来の文化を現象形態として□った資本主義の発展が素通りしてむしろ北海道に開花した土地。我々は日本民主主義革命の障碍を見せつけられます。かゝる集中的表現としての当地が如何なる面から如何にして、而して即時分解してゆくか、我々の課題です。では東京で〔…〕」

この時期の丸山は、農村または地方——とくに長野県——の知的風土について、つぎのような問題関心を抱いていた。

「私の郷里は信州ですが、もちろん一般のお百姓は、大体同じような現象といつていいですが、農村のインテリゲンチヤ、たとえば小学校の教員とか、そういう人たちの間には御多聞に洩れず、哲学的傾向が非常に強いですね。特に西田哲学の層⁽²⁴⁾ですが、これ

は非常なものです⁽²⁵⁾」

そうした精神的土壌を、さらに丸山は、みずからの講演活動の経験に照らして、つぎのように分析している。

「〔…〕東京からそういうえらい先生を呼んできて話を聞くという場合、あまりやさしいことを言うと、かえって評判が悪いのですね。少しわけのわからないことを言うと、むしろありがたがる。あまりやさしいことを言うとおれたちを馬鹿にしている、こういう感じをもつところもあるらしいですね。〔…〕学問を何かお経のようにありがたがつて信奉するという、一種の迷信があるのじやないかと思ふのです⁽²⁶⁾」

したがってまた、問題は、西田哲学自体にあるだけでない。西田哲学から民主主義へと内容がすり替わるだけで、知識や観念を成り立たせる精神的土壌の問題はまったく解決していない。

「そういう点から見ますと、今の民主主義勢力の動き方が、日本人の中にあるそうした「郷愁を呼び起こす一種の郷土的な」ロマンチズムを、頭から無視するような動き方をしている。そこに非常に冷たいものを感じさせるのじやないか。〔…〕しかしそれに対して、〔…〕もつと人間の非合理的な感情の奥底にまで浸透して行き得るような、運動方法がとられなければいけないのじやないか。また啓蒙も、そういう方向に力を入れていくべきじやないか。たとえば啓蒙というとすぐ、民主主義講座というようなものを開いて、東京からえらい先生を呼んで来て、民主主義とはとい

うような話をさせる。すでにそういう段階ではないのじやないか。もう少し人間の胸奥に深くまどろんでいるような感情を大事に取扱つていく。ということは、必ずしもそれを妥協するということじやない²⁶⁾」

一九四八年における丸山の以上のような認識と発言は、つぎに述べる講演・講義活動の経験とも無縁でなかった。

II 一九四七年県内各地における講演活動

(1) 一九四七年の丸山眞男

まずはこの年の「年譜」を一覧しておこう（前掲「年譜」五三頁より摘記の上、一部を補足）。

一月 青年文化会議の座談「新学問論」発表。

三月 「福沢に於ける「実学」の転回」発表。

六月 「科学としての政治学」発表。

八月 信濃教育会主催の講演会で「日本における政治意識の分析」と題して講演（飯田市、松本市、長野市、南佐久郡野沢町（現在の佐久市））。

九月 「福沢論吉の哲学」発表。

十一月 「人間と政治」講演。「現代政治学の課題」講演。

この年の秋、服部之絵、E. H. ノーマン、奈良本辰也、三枝博

音、野原四郎、松田智雄らと安藤昌益研究会を結成。

「年譜」に掲げられている通り、この年の八月、丸山は長野県各地で講演「日本における政治意識の分析」を行った。その内容は、演題から推して、「日本人の政治意識」（一九四八年春、岩波書店従業員組合での講演記録）と重なるものではないかと思われる²⁷⁾。このなかで丸山は、「権力を行使する方もされる方も権力それ自身に価値があるように考える」日本人の政治意識を「権威信仰」とし、そうした「権威信仰」の背景には、「権力が客観的な価値（真・善・美）を独占している」事態があり、権力にたいする個人の自立を阻んでいる現実がある。そのような「権威信仰」が支配的な社会では、第一に、上位者（権威）に自分が引き立てられるために下位者を貶める「自由競争の倒錯的形態」、第二に、上位者からうけた圧迫を、それに抗議・反発するのではなく、鬱憤として下位者に晴らすという「抑圧委譲の原則」が見られる、と分析した²⁸⁾。いわば、論文「超国家主義の論理と心理」を平易に語った内容である。

長野県各地の講演旅行のきっかけについて後年丸山は、「超国家主義の論理と心理」が出た後になると、「……信濃教育会が真っ先に飛んできました。八月には信濃教育会主催の講演会で信州を四カ所回った」と回想している²⁹⁾。主催者の意図が「超国家主義の論理と心理」の著者への講演依頼にあったとすれば、この依頼に応えた丸山の講演の内容が「日本人の政治意識」とほぼ同じであったとする推定は首肯され得る。

さらに丸山は、信濃教育会にたいして講演依頼を受けただけにとどまらなかった。彼はつぎのように回想をつづけている。

「いまから思うと、「丸山等を講演に招いたのは」信濃教育会の自己保存策なのです。信濃教育会は戦争中、全国の教育会が帝国教育会になったのだけれど、帝国教育会信濃支部ではなくて信濃教育会で頑張った。抵抗というほどではないけれど、それが信濃教育会の自慢なのです。他方、教員組合が起こってくる。そうすると、教員組合との対立が出てくる。ただ、ほくが信濃教育会の要請に初めて応じたのは一九四七年ですから、そのころは、まだ、同じ人が両方の幹部を兼ねたりしていました。信濃教育会長と一緒に講演して回る。同じテーマだから、わりあいやさしいのだけれど、四カ所だから相当きつい。どこも学校の先生で超満員。そのあとは先生方とまた話すわけです。先生方との話は面白かったです。

そのあと三回ぐらい信濃教育会の講演はやりました。一九四七、四八年ごろは、ほくの頭のなかに、意識的に信濃教育会を援助しようという気持ちがありました。教員組合に一本化するとよくないという考え方、日教組に対する一つの批判です。〔…〕そのころの日教組は、教師は労働者なりの一本槍。信濃教育会はやや聖職意識なのです。聖職も困るけれども、小学校の先生には使命感が必要だという思いがありました。組合から見たら、この野郎、と思ったのではないかな。ほくは日教組の教研集会には一度も

行ったことがない。それは明らかに戦術的配慮です³⁰⁾

ここで述べられている信濃教育会への「援助」は、宮原誠一との対談「教育の反省」（一九四八年九月）での発言がより詳しい。聖職者のな教育者像を抱く教育会と労働者のなそれを主張する教員組合が対立的な関係に立っていることを詳しく分析して、「〔…〕教育の使命とか理想とかいうことと、教育者の生活要求とが、口ではともかく実際は一向に媒介されないで、ますます天上的なものと、ますます地上的なものにと分裂して行く」とする。そうした事情を抱える長野県で丸山は、「教員の人達といろいろ話をして」、おそらく積極的に助言を行ったものと推測される。その内容は明かされていないが、「今ではきつと、ずっとよくなっていると思います」との希望を語っている。

(2) 一九四七年における講演活動の展開

以下に紹介する信濃教育博物館所蔵の原資料は、丸山および他の知識人たちが長野県各地で頻繁に講演を行ったことを詳細に物語っている。さしあたって一九四七年の丸山の講演活動は、信濃教育会（本会）が積極的に企画・推進したものだと思われるが、同時に、県内各地の郡市教育会（信濃教育会の各部会）でもそれを受け入れる体制が整っていたことがわかる。³²⁾以下ではまず、信濃教育会（本会）の沿革、および本会と部会との関係について簡略的に示し、次いで、一九四七年の長野県（とくに信濃教育会）における丸山の講演活動の位置づけ

について、資料をもとに明らかにしていきたい。

『信濃教育会九十年史』によれば、同会は、一八八四（明治一七）年二月、長野県水上内郡にて、長野教育談会として出発した。「教育学学校管理法教授術等」に関する意見交換、議論を進めてゆくことがその目的であり、会員は「中小学校ノ教員授業生タル者二限」られていた。⁽³³⁾同年一月に改組、長野教育会と改称し、目的を「我邦教育ノ普及改良及び上進」に定め、会員資格をその目的に賛同する者に拡大した。⁽³⁴⁾会員の増加と国民教育制度の浸透とによって、一八八六年七月、全県規模のものへと改組した。こうして発足したのが信濃教育会である。⁽³⁵⁾本会事務局を県庁内に設置したことなどから、同会は県政と密接に結びつきながら運営されて来たことが窺われる。

他方、県内各地に存在する信濃教育会の各支部は、その成り立ちが複雑である。ほとんどが各地の独立した教育会として発足し、追って信濃教育会本会よりその支部として認定を受けている。発足後の過程では、本会からの認定を拒否したり、各地の教育会ごとに統廃合が進められたりする等の変則的な出来事も生じている。たとえば、丸山が深く関わった教育会の一つと思われる埴科教育会は、もともと更級郡と合同の更級教育会として一八八七年に出発したが、五年後廃会、これを憂えた埴科郡長が校長会にはかり、九三年、同会が発足、信濃教育会の支部に加入した。⁽³⁷⁾これより先、更級郡では一八七〇年、更級郡教育会を発足、右の統廃合を経て九三年、信濃教育会更級支部として加入した。⁽³⁸⁾なお、各支部のもとには支会も存在している。

後述する信濃教育会が進めた招聘講演会・講習会も、本会が企画し支部が運営したものだけでなく、各々の郡市教育会やその支会が企画・運営したものがある。その詳細は各会の報告書によって知られるものと明らかでないものがある。

一九四七年に丸山が行った「日本における政治意識の分析」の講演活動は、信濃教育会本会の資料に記述がある。彼は県内を四か所回ったが、そのことを本会は事前に把握していた。この講演会の講師と開催地との選定理由に関わる詳しい経緯は、残されている資料からは確認できない。⁽³⁹⁾しかし先の丸山の回想と重ね合わせるとき、本会が主導し企画した講演会であることは推定可能である。以下では、関連する原資料を紹介しつつ論を進めよう。

この講演会の背景を示す関連資料は、『役員会関係書類 昭和十九年十二月起 昭和二十三年十二月 大日本教育会長長野支部』に綴じられている。丸山の名は以下の資料のなかに確認できる。

まず、一九四七（昭和二二）年六月三日付の各支部長宛の文書で、今度開催する部会長会の議題を事前に知らせる内容のものである。

「六月二一日開催予定の部会長会の議題

〔…〕

二、本年度事業遂行に関する件

一 講演会講習会

a 講演会

イ、法律社会 東大教授 尾高朝雄先生 四ヶ所（長野、

上田、他)

ロ、文学 東大教授 中野好夫先生 四ヶ所(伊那、松本、他)

ハ、経済 東大助教授 木村健康先生 四ヶ所(六月末、南信二ヶ所の予定)

ニ、政治 東大助教授 丸山眞男先生 四ヶ所(七月月中)

ホ、宗教 一高教授 森有正先生
ヘ、哲学 未定

b 講習会

社会科学文部省教科書局 勝田守一氏 六ヶ所
音楽、家庭、図画工作、国語、算数、理科等は県と合同して行う〔…〕

つづいて、丸山の名を確認できる資料は、一九四七年七月三十一日の部会長会の議案を掲げた文書である。この資料は、前の資料にたいして、丸山の講演日程と会場がおおよそ確定してきたことを示している(前の資料に記された日程より一か月後ろにずれている)。

〔…〕

一 本会第二期事業計画遂行について

一 講演会(講習も含む)

イ、丸山講師 八月二十六日より (飯田、松本、中野、野

沢の順序)

ロ、勝田講師 九月中 (飯田、塩尻、豊科)

ハ、森 講師 九月中 (福島、辰野、飯山、上田)
ニ、哲学 未定

ホ、尾高講師 九月中 (諏訪、大町)〔…〕
最後に、つぎの資料が、丸山の講演会の詳細を明確に伝えている。

昭和二年八月八日付の各部会長宛文書である。⁴⁰⁾

「長野県における丸山眞男の講演日程

八月二十六日 九時～一二時 県立飯田中学校

八月二十七日 九時～一二時 松本市高師女子部

八月二十八日 九時～一二時 中野町立小学校

八月二十九日 九時～一二時 県立野沢中学校

なお、演題はすべて「日本における政治意識の分析」

以上の資料により、講師・開催地の選定理由を知ることができないが、丸山は、多様な分野のなかの「政治」を担当する講師として講演を依頼されたことが明らかである。

一九四七年度長野県に招聘されたのは、右の資料に記載の人物だけではなかった。後掲の各部会(郡市教育会)の一九四七年度事業報告書に名を連ねている知識人の顔ぶれはさまざまである。その招聘の人は、本会のほか、各部会が進めたものと思われる。興味深いのは、前節では同じ青年知識人の集まりである青年文化会議が中心的な役割を果たしていたのたいし、信濃教育会の招聘に応じた知識人はそうした世代や専門分野、さらに思想的立場をこえたものだったことにある。

る。天野貞祐（一八八四—一九八〇）、小宮豊隆（一八八四—一九六六）などのいわゆるオールドリベラリスト、務台理作（一八九〇—一九七四）、下村寅太郎（一九〇二—一九九五）や唐木順三（一九〇四—一八〇）など西田の下で哲学を学んだ人びと、のちに「戦後」の代表的知識人と見なされてゆく中野好夫（一九〇三—一八五）や森有正（一九一一—七六）などの名が多く現われる。

逆にいえば、信濃教育会が進めた知識人の招聘活動においては、知識人相互の「横のつながり」は意識されづらい。事実、後年丸山が追悼文を寄せるほど深い交流をもった中野や森について、丸山の回想によれば、この頃「二十世紀研究所」で知り合ったばかりの中野とは長野県で交流をもったことは語られず、森との交流が生れたのは少し先のことであった。⁴¹

しかし、旧時代への「反省」や新時代への「解放感」といった「悔恨共同体」の契機が無いわけではない。とくに一九四七年度にかぎっては、講師の人選に以下のような事情が加わっていたと考えられるからである。日本国憲法がこの前年に公布、この年の五月三日に施行、また教育基本法が同年三月三十一日に公布・施行されたことから、これらの出来事に主催者が関心を傾注したことである。たとえば、尾高朝雄（一八九九—一九五六）が各地で憲法について講演したのは、明らかにそうした時代状況の現われであるうし、丸山が招かれたのも、彼によって新しい政治状況への見通しが得られるとの期待があったためと想像される。木村健康（一九〇九—七三）は、尾高や丸山と異なり

信濃教育会本会による招聘ではないが、県内各地で招かれた理由は、彼らと通じるものであったと思われる。他方において、天野や務台、城戸幡太郎（一八九三—一九八五）という教育刷新委員会のメンバーが招かれたことには、主催者の間に教育者としてより切実な意識が働いていたことが窺われる。⁴²

一九四七年度各部会事業報告書（抄）

◇南佐久部会

総集会 城戸幡太郎「新教育について」（六月一日）

講演会 丸山眞男「政治意識の分析」（信濃教育会と共催）

講習会 「教員再教育講習会」（教組の主催に協力） 井上武士「音楽講習会」 春日部たすく「図画講習会」 その他、英語、ローマ字、

農地問題の講習会

◇北佐久部会

総集会 横田喜三郎「新憲法と恒久平和」（六月二日）

講演会 記載なし

講習会 西尾実「国語科」（削除か） 木下保「音楽」 神津淑助「宇宙の発達」その他、哲学会、体育研究会、書道研究会、図画同好

会等の主催講習会を開催

◇小泉上田部会

総集会 「招待講演なし」（開催日不明）

講演・講習会（県と合同主催、支会、研究団体主催のものは除く）

青木誠四郎「社会科と実態調査」 勝田守一「社会科の具体的問題について」 大昭完「新制高等学校について」 水谷統夫「教育基本法について」 務台理作「教育基本法について」 村田好道「算数取扱について」 下島節「国語取扱について」〔ミス・コーラ・リー「女教員としての心得」 和田齊「新聞について」 岡現次郎「理科の取扱について」 尾高朝雄「新憲法における人間の平等」、中野好夫「文学・人間・社会」、森有正「パスカルの人間観」(以上、信濃教育会主催)

◇諏訪部会

総集会 柳田謙十郎「現代人と宗教」(七月二五日)
講演会 木村健康「民主主義と自由主義」(七月二三日) 中谷宇吉郎「演題不明」(二〇月二八日) 尾高朝雄「新憲法における人間の平等」(二一月一〇日)

◇上伊那部会

講習会 小西謙・矢島彦治「六三制新教科に関する伝達」 重松伊八郎「家庭科について」 和田義信「算数科」 長坂端午「社会科研究協議会」 島田四郎・小島与四男・鶴田正「教育研究所員発表会」
総集会 天野貞祐「所感」(七月二八日)
講演会 中野好夫「現代文学の傾向」 中谷宇吉郎「科学について」 中谷宇吉郎「低温科学」 中原孫吉「高冷地の農業」 村川賢太郎、山中謙二、古島敏夫(演題不明)(歴史研究会主催) 下村寅太郎「演題不明」(哲学研究会主催) 真下信一「人生観としての唯物

弁証法」(中部支会主催) 天野貞祐「演題不明」(南部支会主催)〔ミス・コーラ・リー「演題不明」(女教員会主催)

講習会 西尾実「国語教育の構想」 重松伊八郎「家庭科」 「伝達講習」(英語科外四科目)、田辺古村「書道」、和田義信「数学」、依田新「教育心理学」、城多又兵衛「音楽」、永井三郎「農業」、ヘルマン・ホイペルス「唯物論」、労働基準監督局・安田「労働基準法」(以上、新教育研究会) 諸井(三郎)「音楽」、森有正「宗教」、永田義夫「理化」、竹内良知「哲学」、野口「家庭科」(以上「その他」に分類) 堀豊彦「法理学」、鶴飼信成「憲法」(以上、上伊那文化大学と合同によるもの) 藤岡由夫「日本科学の方向」、天野徳弥「新らしき法律と国民生活」、市川房枝「女性解放問題」、土屋喬雄「日本経済再建の道」(以上、文化講習会と合同によるもの)

◇下伊那部会

総集会 「招待講演なし」(六月一日)
講演会 西尾実「国語教育上の諸問題」 岡本千万太郎「現代かな使いについて」 黒澤庫雄「小学校の新生教育について」 白井吉見「現代文学について」 七澤甚喜「日本農業の将来と定時制高校」
講習会 前川貞次郎「民主主義の歴史」 河田竜夫「統計に関する研究」 教育会体育委員「体育講習(新指導案について)」

◇木曾部会

総集会 吉田精一「島崎藤村について」(二〇月二八日)
講演会 金原省吾「日本文化の構成」 名取堯「文化と芸術」 森有

正「パスカルの間観」石井鶴三「芸術について」笹村草家人
「石井先生の芸術について」

講習会 重松伊八郎「学習指導要領家庭科について」「音楽科」、「一般科」、「英語科」、「家庭科」、「算数科」、「図工科」（以上、第一次新教育研究協議会伝達講習会）「家庭科」、「図工科」、「英語科」、「音楽科」、「一般科」、「算数科」（以上、第二次新教育研究協議会伝達講習会）金子武蔵「近代精神とその超克」「教育心理」、「国語」、「学習効果測定」、「□学科」、「理科」、「教育法規」（以上、教育再教育講習会）西尾実「典座教訓」「□学科」、「社会科」、「国語科」（以上、第三次新教育研究協議会伝達講習会）「体育伝達講習会」（中部・南部・北部の支会毎に開催）

◇東筑摩部会

総集会 木村健康「自由主義・社会主義・民主主義」（六月二一日）
安倍能成「民主主義と文化」（秋季開催、十一月一六日）
講演会 信濃教育会主催に協力したもの 中野好夫「文学・人間・社会」植村環「民主主義の教育」丸山眞男「政治意識の分析」
「県外視察派遣員の報告」（報告者不明）森有正「キリスト教における罪悪の問題」、白井吉見「近代文学について」、上條俊介「造形美術に就いて」、竹内良知「近代精神」、藤森成吉「真理と努力」、桜井武平「甘い化学」（以上、各支会主催）大場磐雄「史学の研究と考古学」、小宮豊隆「漱石と社会批評」、森一雄「図画教育の在り方について」、石森近男「新しい国語教育の着眼点」、熊谷

寛夫「実験物理」、東畑精一「日本農業の将来」、中島海「学校遊戯指導について」（以上、同好会主催）その他

講習会 新学生趣旨伝達講習会、教員再教育講習会（務台理作ほか二名によって三か所）、西尾実「国語」、重松伊八郎「家庭科」、諸井「音楽」、石川二郎「社会科」（以上、県及び信濃教育会と共同主催）島谷いね「家庭科」、大橋秀雄「理科」（以上、部会及び支会主催）「社会」、「国語」、「理科」、「体育」、「図画」、「農業」、「算数」（以上「その他」に分類）等

◇南安曇部会

総集会 谷川徹三「宗教と科学」（六月二五日）
講演会（記載なし）
講習会 白井二尚「共同社会論」（夏季講習会）石井柏亭・宮坂勝・小林邦報「実技と講話」（図画講習会）飯田忠夫「土壌と肥料」、松沢盛茂「農業協同組合について」、清水「農業経営の基準について」（以上、農業教育講習会）

◇北安曇部会

総集会 池上隆祐「新憲法について」（五月二五日）
講演会 今井登志喜「英国憲法について」、池上隆祐「憲法と政治」（以上、木崎夏期大学での憲法公布記念講演会）榎有恒「欧米雑感」高山潔「カリキュラムの研究」尾高朝雄「新憲法における平等」宮下三七男「社会科について」（ミス・コーラ・リー）（演題不明）

講習会 下川頼人「理科」 須度正守「体育」、樋口博子「遊戯」、講師四名「スキー」、丸山哲郎「球技」(以上、体育講習) 西尾実「日本文学史論」、辰野隆「フランス文学」、中野好夫「英米文学」(以上、夏季講習) 青木誠四郎「社会科」、井上武士・伏見三男人「音楽」(以上、支会主催) 大槻・松田「新学制・教科課程」、「体育」、「音楽」、「数学」、「衛生」、「教育法規」、「職業教育」、「国語」、「教育原理」、「教育心理」、「理科」(以上、伝達・再教育講習会)

◇更級部会

総集会 尾高朝雄「新憲法における人間の平等」(五月二六日)
講演会・講習会 吉池・小池「新教育」 淀川「PTAについて」 木村健康「自由主義と社会主義」 市村蔵人「重要美術品について」 田辺古村・高塚竹堂「書道」 田原輝夫「図画教育実技」 時枝誠記「国語教育」 島田喜知治「実業科」 井上武士「音楽教育実技」 井上延男「国語教育」 樋口登雄「社会科について」 西澤一俊「微生物について」

◇埴科部会

総集会 山本有三「文化の問題」(北信一市六郡聯合教育会総会、一月一五日)
講演会 大野連太郎「新教育」 原田視雄「量子物理学」 その他講習会 鈴木・澤・柿崎・大口「体操」 務台理作「教育基本法」 大野□修「新教育研究協議会」 信教・県農「農業経営講習」 和田義信「算数」 音楽学校・平井氏「音楽」 柳田謙十郎「哲学」

木村三郎「図画粘土工作」 小見山栄一「教育法規」 時枝誠記「国語学原論」 森元治吉「万葉集について」 吉川(松高教授)「能について」 濱本勝治郎「平安文学」 岡元治山「理科指導要領」 「化学実験」 「ラジオ組立」 「映字技術」 「モーター組合わせ」 「顕微鏡使用法及び植物構造」 「液体窒素」 「繊維について」 「遺伝について」 其他

◇上高井部会

総集会 木村健康「河合教授とその思想」(七月二四日)
講演会 小宮豊隆「夏目漱石と社会批評」 中野好夫「文学・人間・社会」 大島康正「ギリシヤ哲学」 木村健康「河合栄治郎先生を偲ぶ」(総集会講演と同じか) 坪田讓治「童話と昔話」
講習会 清水多嘉示「美術講習」 □□「上高井における古墳について」 岩崎長思「郷土誌研究について」 小宮豊隆「漱石の道草について」 大島康正「哲学講習」 宗像誠也「基本法と教育法」 竹内照雄「理科」 花岡重行「職業科」 依田新「児童心理と学習心理」 山本幸雄「社会科」 石森延男「国語」

◇下高井部会

総集会「講演なし」(六月二一日)
講演会 矢内原忠雄「日本民族の使命」 内田恒雄「図画作品について」 小野勝年「上代文化について」
講習会 伝田精弥「教育新政法伝達講習」 勝田守一「社会科」 丸山眞男「日本における政治意識の分析」 宗像誠也「新教育原理」

伝田精弥^(編)「教育関係法規」、宮下正治「学習指導要領」、鈴木清「教

育心理学」(以上、再教育講習会) 山浦政「重要美術」 梶農技師

「農業」

◇上水内部会⁽⁴⁶⁾

総集会 なし

講演会 中野好夫「文学に関して」 杉原莊介「野呂遺跡について」

講習会 西尾実「国語」 和田義信「数学」 勝田守一「社会科」 重

松鷹泰「社会科」 諸井「音楽」

◇下水内部会

総集会 「詳細不明」(五月一〇日)

講演会 小見山栄一「教育心理」 塩谷宗雄「体育」 鈴木清「新教

育原理」

講習会 「新教育伝達」(一般・社会・体育・英語・家庭・^(カ)図工・算

数・音楽)(講師不明) 井上武士「音楽」 鈴木清「教育児童心理」

横内斎「植物」 樋口博子「体操ダンス」 森有正「パスカルの人

間観」 石森延男「国語」

◇長野部会

総集会 なし

講演会 西尾実「国語」 野上「古典芸術」 武政太郎「発達心理」

森信三「現代思潮」(ミス・コーラ・)リー「演題不明」

講習会 井上武士「音楽」 和田義信「数学」 重松鷹泰「社会科」

諸井「音楽」 樋口「体育」

◇松本部会⁽⁴⁷⁾

総集会 唐木順三(「民主主義教育について」(十一月一七日) 波

多野完治(「精神発達の基本原理」(臨時総集会、五月三一日)

講演会 野尻上席検事「犯罪防止について」(ミス・コーラ・)リー

「女子教育者のために」 高瀬莊太郎「経済再建について」 小宮

豊隆「国語問題について」 植村環「アメリカの事情」

講習会 西尾実「国語」 木枝増一「現代かなつかいについて」 千

野忠義「家庭生活の科学化」 その他、信濃教育会共同主催のもの、

教員再教育講習会等多数

III 一九四八年北信地域における講演活動

(1) 一九四八年の丸山眞男

まずはこの年の丸山のおもな活動を掲げる(前掲「年譜」五三―五
四頁をもとに、本調査によって新たに確認できた情報を追加)。

二月 清水幾太郎・松村一人・林健太郎・古在由重・真下信一・

宮城音弥・吉野源三郎との座談「唯物史観と主体性」発表。同

人「未来」結成(メンバーは青山敏夫、生田勉、内田義彦、瓜

生忠夫、下村正夫、杉浦明平、寺田徹、中村哲、野間宏、眞下

信一、松田智雄)。

三月 青年文化の会の座談「二つの青年層 その他——丸山眞男

氏を囲んで」を發表。

八月 四日、五日、上高井郡教育会にて「民主主義と議會政治」

講演。一二日、埴科教育会にて「政治の基礎問題について」講演。

演。二一日、更級教育会にて「現代に於ける政治の位置」講演。

九月 ユネスコ共同声明「平和のために社会科学者はかく訴える」

に関する研究を行うための東京・近畿両地域の文科・法政・経済各部会および東京自然科学部会が、吉野源三郎の呼びかけで

発足。

一一月 日本政治学会（理事長 南原繁）設立に参加。みず書房

の執筆者・編集者による「柀会」に参加（メンバーは飯島衛、

石上良平、辻清明、猪木正道、佐々木斐夫、島崎敏樹、日高六

郎、福武直、矢田俊隆、小尾俊人ら。「福沢先生の思想に就いて」講演。

て」講演。

一二月 平和問題討議会に参加（翌年三月に発表された「討議会

議事録」の参加者一覧によれば、メンバーは安倍能成（議長）、

清水幾太郎、蠟山政道、末川博、大内兵衛、都留重人、川島武

宜、桑原武夫、恒藤恭、磯田進、和辻哲郎、矢内原忠雄、宮原

誠一、中野好夫ほか）。

この年の春、岩波書店従業員組合で「日本人の政治意識」と題し

て講演。

このなかで新たに確認できた事実は八月の諸講演である。これらの

講演内容は、『別集』第一巻に掲載された「政治嫌悪・無関心と独裁政

治」および「民主主義政治と制度」と何らかの対応関係をもつと推定される。丸山文庫所蔵の講演記録（他筆）には、前者（資料番号1007-24-8-1）は無題であり、後者（資料番号1007-24-8-2）はこの通りの題が付されていた。

以上の点を総合すると、まず上高井郡における講演「民主主義と議會政治」は、丸山文庫所蔵資料「民主主義政治と制度」を指すことはほぼ確実である。さらに、この講演記録の冒頭が「民主主義を脅かす心理的なものは、前に述べたところである」として、「政治嫌悪・無関心と独裁政治」を受け継ぐ内容を示唆していること、両講演の記録に用いられた原稿用紙が同じであること、上高井郡では二日連続で講習会が実施されたことから、二日間にわたってこれら二つの講演を行ったことが考えられる。

つぎに、埴科および更級の各部会が記録していた「政治の基礎問題について」および「現代に於ける政治の位置」の内容が問題である。まず前者は、「政治嫌悪・無関心と独裁政治」を内容としたものと推測される。「今日は政治について話をしてくれ⁴⁸」という依頼にたいするものとして考えられたのがこの講演だったからである。後述するように内容からも同じ推定が可能と思われる（なお政治（学）の基礎学習と「意識」「精神」とに関する丸山の考えについて次節参照）。

他方、「現代に於ける政治の位置」は、「民主主義政治と制度」と関連しているように思われる。丸山文庫には「現代における政治の地位⁴⁹」という丸山自身が題字を記したメモがあり（資料番号103-4）、内容的

にも「民主主義政治と制度」と対応するからである。以下にこのメモを翻刻しよう。

「現代における政治の地位

政治化の時代——生活と政治の密着

一、経済的自由主義の終焉

政治権力の増大
国家的統制（十九世紀後半）

二、機械・技術の異常な発展

通信・交通・報道

生活の集団化・組織化
↓大衆の登場
政治権力の駆使する技術的手段の膨大化

(新聞・ラヂオ・映画・

テレビジョン)

大衆的独裁政の出現はそれを象徴する。ヒットラーの権力と秦始皇帝の権力、ナポレオンのアルプス越とハンニバルのアルプス越の時間

三、政治権力の国際的組織化（個人の生活を圧する力が、

際、的になった。日本だけでない。

アメリカとソ聯、ともに聯邦。民族国家時代の終焉。

コールド・ウオア

イギリスは帝国（ドミニオン、自治領を含む）

右のメモは、講演「民主主義政治と制度」の冒頭と対応する。⁴⁹その

上で本講演記録は、政治権力の強大化（国際的な組織化）が、「民主主義

義の危機」——被治者（民衆）が治者の権力をコントロールできなくなった事態——をもたらししているとし、とくに議会制の由来と新たな問題とを明らかにする。そうして「今後の民主政」は「直接民主政的傾向」をもち、またそれが望ましいこと、それを機能させるためにもさまざまな制度を考案・採用すると同時に、民衆の日常的な政治的関心が重要であるとする。

この講演の姉妹篇にあたる「政治嫌悪・無関心と独裁政治」（政治の基礎問題について）では、そうした更なる民主化の障害としての政治嫌悪または政治的無関心を指摘し、それがボスや独裁を跋扈させる要因になることを論じている。末尾では、「政治的な情性は排除せねばならぬ」、「固定的な人的連鎖関係を作らないようにする」、「多元的価値にもとづく人間観」を育むことなど五か条にわたり、ボスや独裁の発生を防ぎ、民主化を進めるための心構えを説いている。

前述の宮原との対談「教育の反省」で丸山は、教育者の意識という問題にも目を向けている。

「その場合、こんどは教育する側ですね。教育者としての側に問題を移してみると、なかなか大変なことだと思えます。つまり教育者の使命というか、そういうものについて何かやはり従来と違った新しい考え方が確立されないと、観念的に新しいタイプの人間をつくる教育をするといっても、教育者自身がペスタロッチやヘルバルトは読んでいられるけれども、自分の周囲の日常的な問題を科学的に処理してゆく能力がないような人ならば、どういそい

う教育をする資格がないと思います。そういう場合にやはり一方では、教育者としての自覚と、それから他方では民主主義国家の市民としての自覚、そういうものがどっかの点で統一されなければいけないのじゃないかということに感ずるのですよ⁵⁰

丸山の趣旨は、信濃教育会の幹部——同時に師範学校出身のメンタリテイをもつ者と認識される——が抱く使命感を、社会から切り離された「哲学」ではなく、「民主主義国家の一市民としての自覚」に結びつけてゆくことを要請するものであった。こうした丸山の考えは、「日本人の政治意識」と同じ内容と推定される一九四七年の講演よりも、その翌年に展開した右の講演のなかに一層反映されている。

(2) 一九四八年における知識人の講演活動

一九四八年夏の丸山の講演は、『別集』第一巻「解説」において、この頃文部省が主導した教員再教育講習会の一環と推定されている。しかし『長野県教育史』に従えば、少なくとも全県的規模で開催した講習会の記載が見られない。すなわち同書によれば、「県は大日本教育会長野県支部（信濃教育会を母体とした戦時再編団体（一九四四年一月～四六年一月）と共同主催で、県下各種の学校職員を対象として、新教育講習会を二回開催し」、そのうち第一回（一九四六年五月）に、務台理作「教育ノ問題」、宮沢俊義「民主主義」、青木誠四郎「新教育」の各講演ならびに田中耕太郎の視察・講演を実施、第二回（同

年八月）に大内兵衛の講演・座談を実施した⁵¹。その他の教員再教育講習も概ね一九四六年の実施である。他方、信濃教育会の書類（原資料）にも、この点に関して詳しい記録を確認できない。つまり一九四八年の当地において文部省主導の教員再講習会の実態を確認できない。

少なくとも丸山が関わった講演会・講習会は、各都会（郡市教育会）が主導で進めたものと思われる。おそらく郡市教育会が伝統的に推進してきた講習会・講演会の一環であり（本稿注39参照）、そこに同時代の教員再教育講習という趣旨を加えたものであった。実際、後掲の各都会報告書は、右の丸山の講演を教員再教育講習会として明確に位置づけていない。上高井郡教育会の報告書はたんに「講演」とし、更級教育会は「講習及講演会」としている。なお、上高井郡教育会での「講演」は、『上高井教育のあゆみ』では、都会報告書にも記載されている八月四日に「郡教員再教育講習会」を開催したと記録されている⁵²。

丸山をはじめとする講師の人選の理由に関する記述が諸資料によって確認できないことは前年度と同じである。ただ、『常任委員会 昭和二十三年度 信濃教育会』という綴の昭和二十三年七月二〇日付の会議録には、「再教育委員会の件」という報告事項のなかに「講師の選定輿論を尊重せよ」という一文が見られる。時期的にみて、同年八月に講師を務めた丸山等人選に直接関わるものではないが、当時の教育会の考えを現わしていると想像される。

教育基本法（旧法）公布・施行から一年、そして学校教育法の施行（公布は前年）にあたるこの年は、各都会が主導した講演会・講習会

では、長田新（一八八七—一九六一）が「新教育について」と題した講演を長野県各地で行っているのが目に留まる。おそらく一九四七年五月に日本教育学会会長に就いたことが大きい理由であろう。また、彼が長野県（諏訪郡（現在の茅野市）出身であったことも理由の一つであったかもしれない。

一九四八年度各部会事業報告書（抄）

地域別報告書

◇下水内教育会

総集会 天野貞祐「平和と日本への道」について（六月二十七日）

講演会 梅根悟「生活指導」について（八月二十七日）

講習会 宮原誠一「社会改革と教育」（八月六日） 依田新「環境に

ついて」（八月七日） 川島成宣^{（武蔵）}「新憲法について」（九月二〇日）

三名（講師名の記載なし）「芸能、算数、国語」（二〇月三〇日）

◇長野市教育部会

総集会 長田新「自由の世界史観と新教育」（二〇月二日）

講演会 下村寅太郎（演題不明）（一九四九年）三月二日）

講習会 「国語講習会」（講師不明）（一九四九年）二月二日）

◇信濃教育会松本部会⁵³

総集会 高木金之助「世界の動きと日本」（二一月一三日）

講演会 なし

講習会 小沢謙一「社会科とカリキュラムについて」 浅香幸雄「社

会科講習」 臼井吉見「近代文学について」 時枝誠記「国語講習会」 西野成夫「理科講習会」 渡辺三次「体育講習会」 五藤斉三「天体観測講習会」

◇上水内教育会⁵⁴

総集会 「郡総会を実施」

講演会 「中谷宇吉郎「科学教育について」（二一月七日、一市六郡

連合教育会） 野生司香雪「日本を離れて日本の仏教を見る」（一

一月一三日、中部教育会総会）」

講習会 下村寅太郎「哲学」（二一月、一日間） 鈴木辰彦「図工」

（八月、三日間） 井上武士「音楽」（八月、二日間） 渡辺三次「体

育」（年五回実施）

◇埴科教育会⁵⁵

総集会 「会員演説のみ」（五月一七日）

講演会 丸山眞男「政治の基礎問題について」（八月二日） 片山

俊彦「ヒューマニズムについて」（四月二六日） 林部二「新教

育について」（五月二〇日）

講習会（再教育講習ハ県と合同） 新田稔「国語」（八月三日） 柳原

定行「数学」（八月三日） 石山修平「新教育原理」（九月七日） 長

坂端午「小学校社会科」（二〇月二七日） 剣持和雄「教育心理」

（二一月四日・五日） 勝田守一「中学校社会科」（二一月一三日）

〔…〕

◇上高井郡教育会

総集会 天野貞祐「文化と教養」(六月二六日)

講演会 記載なし

講習会 石山修平「新教育について」(八月三日) 丸山眞男「民主

主義と議会政治」(八月四、五日) 梅根悟「教育課程論」(八月四、

五日) 清水多嘉示「写生指導並に批評」(八月九、一〇、一一、

一二日) 樋口・熊岡「体育ダンス」(八月二、二二日) 大島康

正「デカルトと現代哲学の課題」(八月一八日、一九日)

◇下高井郡教育会

総集会 大間知篤三「我が国に於ける家の制度」(十一月二〇日)

講演会 清水幾太郎「文化と教育」(五月九日) 折口信夫「文学に

ついて」(二月一日)

講習会 初任者講習会〔詳細略記〕 音楽体操講習会〔詳細略記〕

◇南安曇教育部会

総集会 清水幾太郎「教育と人間観」(七月二四日)

講演会 〔記載なし〕

講習会 白井二尚「利益社会と近代社会」(夏季講習会、八月八日)

小林邦報〔演題の記載なし〕(函工講習会) 伏見三男人「音楽創

作教育について」(音楽講習会)

◇東筑摩部会

総集会 望月市恵「リルケのこと」(六月八日)

講演会 長田新「新教育の理念」(十一月二日)(以上、部会主催)

竹内良知「現代思想について」(十一月二〇日)、千野光茂「科学

教育について」(二月五日)、西尾実「文学機能について」(二月一

二日)、田中富次郎「藤村の作品について」(二月二〇日)、神波

利夫「社会科について」(九月一〇日)、淀川茂重「新教育につい

て」(二月二二日)、三光多熊治「戦後の歴史観」(四月一八日)、

吉野文六「最近の国際情勢」(七月一〇日)(以上、支会主催) 森

有正「哲学講演会」、大場博士「史学講演会」(以上、同好会主催)

講習会 西野成俊「小学校理科四年の実践記録と五六年教科書の見

透しに就て」(理科)(二月一三日)(以上、部会主催) 森規矩男

「算数」(八月三〇日)、大澤すえ子「遊戯」(九月一八日、一九日)、

大澤すえ子「学校体育ダンス」(九月二三日)、寺島操「茶道」(数

連続)〔…〕

◇木曾教育会

総集会 安倍能成「日本文化の性格」(七月二七日)

講演会 上野益三「生物学の歴史」 矢内原忠雄「聖書の婦人観」(女

教員会主催)

講習会 竹内良知「教育原理」(二月一八日)、岩重(松高教授)

「教育法規」(二月一日)、沢田(女師教授)「教育心理」(二

月二〇、二二日)、伊藤(視学)「社会科」(九月一五日)、「職業

科」(講師不明(茨城女師附中教諭))(九月一四日)、横澤(視学)

「函工科」(二月一三日) 赤羽(視学)「数学科」(二月二日)

(以上、教員再教育講習、県主催) 馬場四郎〔演題不明〕(二月

二九日、三〇日)(以上、社会科講習) 上田泰治〔演題不明〕(哲

学講習、木曾哲学会主催）（その他、映写機技術講習・音楽ワー
クブック講習）

夏季大学 谷川徹三「文化の基本構造について」（八月六日） 下村
寅太郎「善の研究」の基本理念」（八月七日、八日） 名取堯「藤
村の文学」（八月九日） 務台理作「人間性の理念と其の形成」（八
月一〇日）

◇下伊那教育会

総集会 中野好夫「現代文学に就て」（六月六日）

講演会 安倍能成「演題不明」（七月一九日） 鈴木清「演題不明」

（十一月〔日付不明〕） 下条康磨「演題不明」（二月二八日）

講習会 横内富「植物講習」（五月二五日）二九日、六月一日）二

一日） 渡辺三次「体育ダンス講習会」（六月二六日）二七日） 矢

澤「漢文講習会」（七月三日） 北原□□「鳥の声の講習会」（七月

一〇日） 臼井吉見「近代文学講習会」（七月一七日） 吉田精一「近

代詩の講習会」（九月二五日） 馬場四郎「社会科に関する講習会」

（九月二七日） 守屋判助「文法講習会」（十一月一四日） 興水実

「国語講習会」（一月六日） 郡委員「支会単位体育講習」 星山三

郎「英語講習会」 島田喜知「職業科講習会」 下村寅太郎「哲学

講習会」 柳田謙十郎「唯物学と宗教」 町田等「音楽講習会」 前

田貞次郎「近代史」（十一月〔日付不明〕）

◇上伊那部会

総集会 木村健康「社会主義と民主主義」（七月一二日）

講習会・講演会 大内兵衛「現下の経済問題」（八月九日）、篠遠喜

人「染色体の科学と其の応用」（一〇月三日）、木村一治「原子物

理学」（一〇月三日）、中谷宇吉郎「科学」（十一月六日）、エステ

ル・ローザ「ララの精神」（五月四日）（以上、部会主催） 山中謙

二・林健太郎「西洋哲学史」（八月二、三日）（以上、部会・歴研

共催） 下村寅太郎「社会哲学」（八月四、五日、二月二七日）、竹

内良知「近世哲学史」（八月四、五日、九月二六日）（以上、部会・

哲研共催） 谷川徹三「文化の基礎概念としてのヒューマニズム」

（八月七日）（以上、部会・上伊文大共催） 町田等ほか「音楽講

習会」（八月一九日、二〇日）（以上、部会・音研共催） ヘルマン・

ホイペスル「民主々義日本と宗教」（九月五日）（以上、部会・協

会共催） 町田菊之助「服装について」（二〇月二九日）（以上、部

会・女教共催） 山本莊毅「陸水学」（十一月一四日）（以上、部会・

地理研共催） 浅香幸雄「堰筋研究」（十一月二日）（以上、部会・

委員会共催） 田原輝夫「新しい図画の在り方」（十一月二八日）、

正木俊二「衛生講習」（十一月二八日）（以上、部会・図委共催）

興水実「単元学習について」（十一月五日）（以上、部会・国研共

催） 山口進「版画講習」（二月二六日）（以上、部会・図研共催）

林部一二「新学□□講習」（二月二五日）（以上、部会・機委共催）

西尾実「国語教育について」（五月八、九日）（以上、部会・国研

共催） 有賀喜左衛門「歴史の本質」（七月二二日）（以上、部会・

歴研共催） 矢沢大二「山国と気象」（八月一九日）、矢花淳男「顕

微鏡の理論」(一〇月一〇日)、千野光茂「理科について」(八月二
八日)(以上、部会・理研共催) 古島敏夫「実地踏査による堰筋
研究」(六月五日)(以上、部会・委員会共催) 菅谷重治「気象講
習」(六月三〇日ほか六回)(以上、部会・気象委共催) 安達トミ
ヨほか一名「舞踏講習」(七月二三日、二四日)、鈴木喜代松「視
覚教育」(一月二七日)(以上、北部支会主催) 清水幾太郎「教
育と人間観」(七月二二日/二三日)(以上、東部支会/中部支会
主催) 古島敏夫「新しい農家の進むべき道」(八月三〇日)(以上、
東部支会主催) 畠山久尚「気象と生活」(七月一〇日)(以上、南
部支会主催)

◇諏訪部会

総集会 美濃部亮吉「日本経済再建の見透し」(七月二〇日)
講演会 細谷俊夫「新教育について」 中野好夫「日本文学の問題」
天野貞祐「今日に生きる倫理」 三宅泰雄「大気の化学」 坪田讓
治「教育の諸問題」 五味保義「国語の問題について」 名取堯
「ヒューマニズムについて」
講習会 馬場四郎「社会科学の基礎」 保柳睦美「社会科学の問題」 寺
島士「健康教育について」 井上武士「音楽講習」 高野忠「音楽
実地指導」 渡辺三次「学校ダンス」

◇北佐久教育会

総集会 蠟山政道「政治と教育」(七月九日)
講演会 杉田智雄「近代の歴史観について」(九月三日) 増田三良

「国語カリキュラムについて」(一月七日) 一志茂樹「郷土志」
(二月八日) 高野豊文「郷土志について」(三月六日)
講習会 前橋医専教授三名「結核予防について」 井上武士「音楽教
材研究・教育法」 堀イチ子「家庭科について」 木下保「音楽講
習」 遠山喜一郎「徒手体操について」 樋口博子「体育ダンス」
澤崎梅子「料理講習」 中尾「図画講習」

◇南佐久教育会

総集会 なし

講演会・講習会 渡辺三次「遊戯」(七月一八日) 宮坂仁吾「球技」
(七月九日) 寺島士「体操」(七月二〇日) 清水多嘉示「図画・
手工」(八月六日、七日、八日) 住田勝美「心理学」(八月九日)
井上武士「音楽」(八月一〇日、一一日、一二日) 金子武蔵「哲
学」(八月一七日、一八日、一九日) 渡辺三次「遊戯」(九月七日)
長田新「教育学」(一〇月四日)

◇更級郡教育会

総集会 「記載なし」

講習及び講演会 丸山眞男「現代に於ける政治の位置」(八月二日)
石山修平「演題不明」(九月一〇日) 長田新「演題不明」(一二
月一日)

高校部会報告書

◇第一区高校部会

総集会(発足式) 田中耕太郎〔演題不明〕〔ミス・コーラ〕リー

〔演題不明〕(開催日不明)

講習会〔詳細なし〕

◇信濃教育会高校第三部会

総集会〔記載なし〕

講演会・講習会〔記載なし〕

◇長野県東高等学校教育会

総集会〔講演なし〕(五月二二日)

講演会 長田新「新教育に就いて(欧米教育一般)」(一〇月開催)

講習会 寺島操「家庭科」(九月一日) 牛込^カすゑ「被服」(一〇月

一日) 藤井信「国語」(一〇月二三日) 原田親貞「国語」(一

〇月二三日) 近藤忠義「国語」(一一月二〇日) 松平支子「家庭

経理」(九月一日) 浅川正一「体育」(一一月二二日) 遠山喜

一郎「体育」(一一月二二日) 小沢久夫「体育」(一一月二二日)

成田成寿「英語」(一〇月一四日、一五日) 寺西武次「英語」(一

一月二二日) 富永惣二「図工」(一一月二七日) 今泉篤男「図工」

(一一月二八日) 永田義夫「生物」(一一月二三日) 一条善老「生

物」(一一月七日) 篠遠喜人「生物」(一一月二〇日) 十亀豊一

郎「社会」(八月一八日) 石田龍次郎^{リウ}「社会」(一〇月二二日) 勝

田守一「社会」(一一月一四日) 石原三郎「理化」(一〇月二二日)

藤木源吾「理化」(一〇月一八日) 松崎一「理化」(一〇月二三日)

〔…〕

◇中信高等学校教育会

総集会(発会式) 吉野文六「現在の国際状況と日本の将来」(七月

〔日付不明〕)

IV 一九四九年(以降)の県内各地における講演・講義

(1) 一九四九年(以後)の長野県と丸山

信濃教育博物館所蔵の原資料でまとめたものは、以上に述べた一九四七、四八年度のものである。最後に、一九四九年以降の長野県における丸山の講演・講義その他の活動を一括して示しておこう。「年譜」(前掲書五四頁以下)によれば以下のような評伝的事実が挙げられる(本調査によって新たに確認できた情報を追加。私的な旅行を除く)。

一九四九年

一月 「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」に参加。

三月 「平和問題談話会」設立に参加(メンバーは、安倍能成(代表) ほか前記討議会の参加者など)。「知識人の会」結成(メン

バーは、清水幾太郎・中野好夫・吉野源三郎ほか)。

五月 「軍国支配者の精神形態」発表。

六月 E. H. ノーマン・都留重人との鼎談「歴史と政治」発表。

「ヨーロッパと日本」講演。

八月 長野県各地で講演（更級郡で「現代に於ける政治の位置
アメリカの日本人観（菊と刀について）」講演、信濃木崎夏期大
学で「近代意識と現代意識」講演）。『信濃毎日新聞』に「戦争
初期の回顧」発表。

一〇月 「肉体文学から肉体政治まで」発表。「柀会」メンバー共
同執筆で『社会科学入門』刊行（丸山は「政治学」を執筆）。田
中耕太郎・猪木正道との鼎談「現代社会における大衆」発表。
一二月 高見順との対談「インテリゲンツィアと歴史的立場」発
表。

一九五三年
八月 郵政省の研修所の教官講習会で「現代文明と政治の動向」
講演。

この年、諏訪季節大学（主催・諏訪教育会）で「現代政治の様相」
講演。

一九五七年

八月 『信濃教育』に「思想と政治」発表。

一九五八年

七月 『信濃教育』に「政治的判断」発表。

一九六四年

六月 『信濃毎日新聞』に南原繁との対談「学問と政治」発表。

一二月 『信濃毎日新聞』に「幕末における視座の変革」（原題「日
本思想史における佐久間象山」）要旨、『信濃教育』に全文発表。

一九六六年

この年、財団法人信濃通俗大学会役員（評議員）に就任（一九七
六年より二期目）。

このようにみると、その後も講演等による長野県での活動は行われ
たが、一九五〇年以降は、それ以前ほど積極的なものではない。⁽⁵⁶⁾ 戦後
の長野県における丸山の講演活動、またそれに付随した信濃教育会へ
の「援助」は、だいたい一九四九年頃に一旦終息する。このように見
るとき、一九四九年の活動に関して特筆すべきは、夏に行われた以下
の二つの講演活動である。

第一に、丸山は、八月二一日、「現代に於ける政治の位置 アメリカ
の日本人観（菊と刀について）」と題する（またはこのような趣旨の）
講演を行った。その情報は、前節までに紹介してきたような部会報告
書のうち、更級部会のそれに開催記録が残っている。⁽⁵⁷⁾ 演題のうち前半
部分「現代に於ける政治の位置」は、前年度に同地で行ったものと重
複する。他方、後半部分「アメリカの日本人観 菊と刀について」は、
今のところそれに該当する原稿や記録を丸山文庫のなかに見つけるこ
とができない。⁽⁵⁸⁾ ただし、猪木正道との対談「何を読むべきか」（一九四
九年七月）のなかに、ルース・ベネディクトの業績をつぎのように評
価する丸山の発言がある。

「〔…〕いきなり政治機構とか、あるいは議会制度とか、政党とは
何ぞやとか、そういった抽象的な解説よりも、ああいった〔朝日
評論〕四月号掲載の〕実態調査を基礎とした論文ないし著書、そ

れから政治意識の分析、そういったものから、だんだん上部の政治機能についても関心を持つようになるのが、自然の、また正しい行き方ではないかと思うんですがね。そういう意味じゃ、最近翻訳の出たルース・ベネダイクトの『菊と刀』、必ずしも政治心理だけを書いてある本ではないが、日本人の精神構造の分析として優れているし、理解もしやすいでしょう⁽⁵⁹⁾」

長野県でもこのような観点に沿った講演をしたとすれば、「日本における政治意識の分析」、「政治嫌悪・無関心と独裁政治」、「民主主義政治と制度」につづけて、一九四九年度に『菊と刀』をテーマに選んだことには、精神構造（心理・意識）の面から政治をとり扱うという、丸山の強い意思が浮かび上がってくる。

第二に、信濃木崎夏期大学でもそうした意思が貫かれていた。講演「近代意識と現代意識」の内容は、現在ある程度まで明らかである。すなわち、同年六月、協同組合で行った講演「ヨーロッパと日本」とほぼ同内容という推定がある。実際、「ヨーロッパと日本」の講演記録を収納した封筒には、この表題とは別に、丸山自筆で「近代意識と現代意識」という表題が記されている⁽⁶⁰⁾。

『別集』第一巻所収の「ヨーロッパと日本」によれば、福沢諭吉『文明論之概略』が「多事争論」の文明等としてとらえたヨーロッパは、「近代」のそれだった。「多様性の中における統一」(Unity in Variety)としてF・ギゾー等が認識したものであり、古代・中世のヨーロッパにはないものだった。「視圏の拡大」、すなわち、みずからとは異なっ

た文明や文化との接触によってそうした状況にいたった。自由経済(市場経済)、リベラル・デモクラシー、宗教・学問などの文化価値の自律といった現象にそれは現われ、社会的分業と個々の分野を追求してゆく「専門人」が理念とされる。——ここまでが「近代意識」の形成と特質を論じたものである。

しかしそうした均衡が、経済の領域から崩れはじめてゆく。すなわち、格差の拡大や過酷な労働状況が現出し、近代の市民社会は揺らいでゆく。この状況にたいしてK・マルクスは「人間解放」を掲げて資本主義批判を進めた。近代がもたらした「人間性」の危機にたいする意識は、ニーチェやキェルケゴールにも共通している。しかし、近代の市民社会に代る社会体制を築き得ないまま、一方ではロシアにポリシェヴィズムの国家が、他方ではドイツにファシズムの国家が台頭した。ファシズムの国家が潰えた現在、国際社会を構成しているのは、一方で「近代」を絶対視する米国、他方では「近代」を経験しないまま「近代」の先にある「現代」的イデオロギーを体制化したソ連である。イデオロギーのうえで相容れない二つの国家が国際情勢を左右し得る状況のなかで、異質なものをそのなかに取り入れてきた日本には、両イデオロギーのコミュニケーションに寄与できる使命があるのではないかと、冷戦構造の下で丸山は展望を示している。

さしあたって、この主題は、丸山が戦後最初に書いた「近代的思惟」(一九四五年一二月、前掲『文化会議』創刊号に掲載)以来の問題意識を直接的に受け継いでいる。重要なことは、丸山が意識していた課

題が、近代化と同時に、現代化でもあったというその二重性にある。そこには、戦前の「超近代」論との鋭い緊張関係があった。⁶¹したがって、繰り返し述べているように、西田哲学など「超近代」論を支えた諸理論が長野県で読まれ浸透していることを危惧した丸山にとって、この主題は、かなり切実な意味を帯びていたと考えられる。

(2) 一九四九年における知識人の講演・講義

一九四九年の講演・講義の活動のうち、第一に県内各地の講演活動は、一九四七、四八年と類似する形で進められたと推定される。後掲のように、一九四七、四八年度とほぼ同じ書式の部会報告書を確認できるからである。しかし確認できた一九四九年度の報告書は、更級部会のみであり、県内各地の知識人招聘の全体像に関しては更に別の調査が必要とされる。

第二に、信濃木崎夏期大学の一九四九年度講義は、矢部貞治「民主主義の本質と価値」、宮沢俊義「戦後の諸国新憲法」、高野雄一「国際社会の組織化と国際法」、矢沢惇「企業法の諸問題」などとともに丸山のそれが行われた。⁶²同大学は、実施主体である「財団法人信濃通俗大学会」が一九一六年に発足、翌年八月より夏期大学は始まった。信濃教育会関係者のなかでも、とくに北安曇野教育会が設立に深く関わっている。⁶³

設立以降、戦前の講師・講義に社会科学関連のものはほとんど無かつ

たが、一九四八年度より矢部・高野・宮沢等が講師を務めて以降、東大法学部の学者が継続的に講師に就いている。⁶⁴おそらく丸山も、そうした信濃木崎夏期大学の運営方針と東大関係者の紹介とによって講師に就いたものと思われる。なお後年、丸山は一九六六年と七六年の二期にわたり同大学の評議員に就いている。これより先、一九五〇年には丸山幹治が幹事に就いていた。父子ともに長野県出身の知識人として認識されていたことが窺われる。

一九四九年度各部会事業報告書（抄）

◇更級郡教育会

総集会 矢内原忠雄（演題不明）（春季・七月一〇日） 池上隆祐（演題不明）（秋季・十一月二八日）
講演会 丸山眞男「現代に於ける政治の位置 アメリカの日本人観（菊と刀について）」（八月二一日）

おわりに

以上の各資料が示すところに従えば、はじめ同世代の青年文化会議を単位として進めてきた「啓蒙」活動は、現地の組織的かつ広範な求めを反映する知識人招聘運動によって、世代や専門分野、思想的立場をこえた多様な活動へ展開していった。そこに関わった人びとの多くが岩波書店を拠点とする平和問題談話会に結集してゆく。この平談会

は、一九四〇年代末以降の冷戦構造の顕在化、国内における「逆コース」の進行に危機感を抱く知識人の「共同体」であった。

しかし、以上の論述からもすでに示唆されているように、「悔恨共同体」にたいする丸山の認識・評価自体が一樣ではない。後年の「近代日本の知識人」や「一九五〇年前後の平和問題」における丸山の考察だけではない。つとに「肉体文学から肉体政治まで」（一九四九年一月）の末尾で丸山は、「……君も田舎で僕など相手に講釈する暇があったら、もう少し広く天下によびかけて、せめてこういう際インテリゲンチヤの結集にでも努力したらどうなんだ」というA氏の言葉にたいして、B氏につきのように語らせている。

「ただそのインテリゲンチヤの結集という奴ね、これが盛んに唱えられて色々会合などもあるが、どうもあまり効果が挙がらないんだ。なぜ挙がらないか、むしろインテリ自身の怯懦とか無関心とかいうこともあるだろう。だがどうもそれだけじゃなさそうだ。それがね、今日の話の、精神の次元の独立があるかどうかというところに引掛ってくると思うんだよ」⁽⁶⁶⁾

本稿が示した一九四〇年代後半の知識人の活動は、とくに信濃教育会が主導したものについて見るならば、教育基本法に示された新しい教育理念——「人格の完成」——への関心の下で進められた。「悔恨共同体」は、丸山自身がいうように、必ずしも明確な組織をもったものに限られないし、主題も安全保障や平和問題に限られない。「悔恨共同体」の実相に迫るためには個々の知識人と知識人相互の連帯とのあ

り方を把握してゆくことが求められる。この点から以下のような研究課題が提示され得る。

第一に、丸山以外の人物が当地でどのような講演を行っていたかを明らかにしてゆくことである。そのことによつて、一方、丸山が「近代日本の知識人」等で述べているように、知識人ごとに異なる「悔恨」の内容を明らかにし、相互の比較を可能にしてゆく。同時に他方では、教育あるいは人間の問題が安全保障や平和の問題へどのように接続してゆくか、知識人ごとの関心の構造を明らかにすることができると思われる。

第二に、個々の知識人がその「悔恨」にとどまることがなかったことから、個々の講演を他の著述と関連づけることが求められる。たとえば、平談会に参加した知識人たちの一部は、新しい時代状況への認識と並行して、とくに講和問題が深刻化してくると脱会してゆく。この点に関して、丸山文庫所蔵の平和問題談話会関連資料（吉野源三郎文書）がとくに重要な鍵となるであろう。

より個別具体的な問題・事象に立ち入った調査・研究を進めてゆく上で、本稿が紹介した原資料はその地図となり得るのである。⁽⁶⁶⁾

注

(1) 本稿のもとになった資料調査は、したがって二〇一二〜一六年度に進められた丸山眞男研究プロジェクト（文部科学省平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）の一環として実施された。ただし本稿は、その後の私

費による追加調査(二〇一七年九月四、五日)の結果をもふくんでいる。

- (2) 資料調査を行った機関は下記の通りである(調査日程順)。この調査にあたり、とくに助力にあずかった方々を併記する。記して感謝申し上げたい。

飯田市立中央図書館 坂元香氏、関口真紀氏

県立長野図書館 山崎まゆみ氏

信濃教育博物館 岩下寿恵氏

- (3) 『千葉大学経済研究』第一四巻第一号、千葉大学経済学会、一九九九年六月。著者によれば、「〔…〕飯田市立中央図書館の牛山氏からの情報提供によれば、下伊那郡の川路国民学校で「夏期成人文化講座」が開かれていて、野間(宏)が「解放の文学」、武谷三男が「日本科学の反省」、川島(武宜)が「日本農業と土地問題」、丸山が「法の意識」として夫々講演している。／これらの講演は概して好評であった。それは壇の上から一方的に説くだけのものではなかったからである。また講師自身の方でも、東京の偉い先生の話を書くのが文化であるという一般の雰囲気をごわそうと心がけていたからである」としている(一八三頁)。この講義の開催情報の根拠はのちに示す。ただし各講義への評価の資料的根拠は不明である。

- (4) 『別集』第一巻、四一三頁。

- (5) 現在、『丸山眞男集』別巻・新訂増補(岩波書店、二〇一五年)の「正誤表」がインターネット上で公開、そのなかで最新の情報が示されている。

- (6) 前掲『丸山眞男集』別巻、二七頁。

- (7) 丸山眞男ほか「二つの青年層 その他——丸山眞男氏を囲んで」『青年文化』第三巻第二号(創生社、一九四八年三月)二九頁。なお、松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本丸山眞男回顧談』下(岩波現代文庫、二〇一六年)三三頁、荻部直「遊び」とデモクラシー——南原繁と丸山眞男の大学教育論』『政治と教育』(年報政治学二〇一六—I、木鐸社、二〇一六年)一〇四—一〇五頁を併せて参照。

- (8) 前掲『丸山眞男集』別巻、四六、五一頁。

- (9) 「私の定宿——昔日のサロン」『中央公論』第八一年第一〇号、中央公論社、一九六六年一〇月。これは、「天狗の湯」を定宿としていた桑原武夫と丸山

とを同時に扱ったグラビア記事で、丸山執筆の短い文章が『丸山眞男集』第十六巻(岩波書店、一九九六年)に掲載されている。また、たとえば、加藤周一とののはじめての出会いが長野県だったという回想も残っており(『加藤周一著作集』をめぐって)『別集』第三巻(二〇一五年)三三三頁編者注⑭)、こうした二事をとっても、丸山はもとより、同世代の知識人にとつて、長野県(と一口にいっても県内は更に東信・北信・南信等の地域に分かたれる)が特別な意味をもっていることが知られよう。

- (10) 『丸山眞男集』第十巻(一九九六年)一三三八、一五三三頁。

- (11) 同前二五四頁。

- (12) 都築勉「戦後日本の知識人——丸山眞男とその時代」(世織書房、一九九五年)、小熊英二(『民主』と『愛国』——戦後日本のナショナリズムと公共性)(新曜社、二〇〇二年)、竹内洋『革新幻想の戦後史』(中央公論社、二〇一一年)、出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』(法律文化社、二〇一五年)など。

- (13) 丸山眞男手帖の会編『丸山眞男話文集』1(みすず書房、二〇〇八年)二七九頁以下。

- (14) 以下、本稿で丸山文庫所蔵資料に言及する際には、書誌情報と共に、資料IDを併記する。資料IDは、図書・雑誌の場合は「登録番号」とし、草稿類の場合は「資料番号」として、番号を示した。

- (15) 以降の講義日程については拙稿「庶民大学三島教室関連資料調査報告」、本『報告』第十二号参照。

- (16) 丸山「三島庶民大学講義要旨「十九世紀以降欧州社会思想史(全八講)」——特に独逸を中心として」(丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ、資料番号⑤⑥)四九頁。前掲『丸山眞男話文集』1、一九六頁を併せて参照。

- (17) 古矢旬編『超国家主義の論理と心理』他八篇(岩波文庫、二〇一五年)一四頁。

- (18) 川島武宜『日本農村の生活意識』(農村文化叢書第一輯)、野間宏「解放の文学」(農村文化叢書第五輯)は、ともに農村文化協会長野支部より一九四六年七月に刊行された。各書の冒頭には、前者が同年三月二三日の須坂町

における農村青年文化講座の講演記録に、後者が上伊那郡・諏訪町における三月二十七日・二十八日の同講座の講演記録にもとづくとの断り書きがある。

- (19) 県立長野図書館で、農文協が同時期に発行した資料「農村青年通信講座」を探索したが、当該資料は農村青年向けの通信教育講座の教材であり、活動記録についての記述は無かった(ただし監修者には川島武宜や古島敏雄が加わっており本題の青年文化講座との関連性を示唆している)。また、同図書館では、一九四六年に発行された郷土雑誌を点検したが、当該講座の案内や開催記録等を見つけることができなかった。

なお、本調査中、県立長野図書館職員のご協力により、同時期に発行された地方紙『新信州日報』・『飯田の新聞』(現・『南信州新聞』)が飯田市立中央図書館に所蔵されていることを知った。そこで、飯田市立中央図書館に照会し、確認を依頼した(二〇一七年八月)ところ、当該講座に関する記事は無いとのことである。

最後に、主催者(または推進者)と見られる農文協が作成した原資料の調査が残っている。農文協図書館(現在休館中)所蔵の資料にその手がかりがあるかもしれない。

- (20) 前掲『定本丸山眞男回顧談』下には、以下のような発言がある。「一九四六年の夏に、女房がお産するために、母親たちが疎開している(更級郡)青木島(村)の小山の実家に頼っていきました。ほくも信州にしょっちゅう行っただですけれど、それも惨憺たるものです。〔…〕(一〇二頁)。

- (21) 青年文化会議が関与した長野県での講義活動を論じたものとして、笹川孝一「戦後社会教育実践史研究(その一)——農村文化協会長野県支部「農村青年通信講座」の成立過程」(『人文学報 教育学』第一五号、東京都立大学、一九八〇年三月)、竹本洋「内田義彦と「青年文化会議」の啓蒙活動」(『大阪経大論集』第六二巻第一号、大阪経済大学、二〇一〇年五月)がある。いずれも一九四六年夏の講座について詳細な記述はない(前者一三七―一三八頁、後者二〇頁を参照)。

- (22) 『帝大新聞』(一九四六年九月一〇日付)に、青年文化会議同人の夏季の講義活動を伝える記事がある。前掲竹本「内田義彦と「青年文化会議」の啓蒙活

動」九頁を併せて参照。

- (23) 宛名・日付の記載がなく、「東京都文京区菊坂町五八菊坂寮内」という宛先のみ記されている。なお、五銭切手が貼付されている(葉書の切手が五銭だったのは一九四五年四月〜四七年七月)。

- (24) 前掲「二つの青年層、その他」二九頁。なお、この座談を掲載した『青年文化』の発行団体「青年文化の会」は青年文化会議とは直接的な関係がない。青年文化の会は、新潟県新潟市を拠点とする団体で、それゆえに地方青年の育成に関心をもち、丸山を招いてそうした主題を議論したものと思われる。

- (25) 同前三〇頁。木村健康との対談「学生の表情」、前掲「丸山眞男座談」第一冊、一九一二〇頁参照。

- (26) 前掲「二つの青年層、その他」二〇―二二頁。青年文化会議同人の座談「新学問論」、前掲「丸山眞男座談」第一冊、八四頁参照。

- (27) この推測が正しいとすれば、「日本人の政治意識」の内容は、これまでに知られていた岩波書店従業員組合の講演より前にある程度まとめられていた。さらに、演題の類似性という点では、「現代社会意識の分析」(一九四六年一月)にまで遡ることができる。この表題は、庶民大学三島教室での開催案内にもとづくが、丸山自身の講演原稿やその記録といった資料は残っていない(前掲拙稿「庶民大学三島教室関連資料調査報告」参照)。

- (28) 『丸山眞男集』第三巻(一九九五年)三二―三二八頁。

- (29) 前掲『定本丸山眞男回顧談』下、一一四頁。

- (30) 同前一四―一五頁。

- (31) 前掲「丸山眞男座談」第一冊、一五四―一五五頁。

- (32) 信濃教育会本会の関連資料のなかに、前述の教員組織に関わる丸山の助言の詳細を知り得るものは確認できなかった。そのため、丸山が助言したのは郡市教育会のいずれかを指すのではないかと思われる。

- (33) 信濃教育会編「信濃教育会九十年史」上(信濃教育会出版部、一九七七年)。「信濃教育会五十年史」覆刻版)四頁。

- (34) 同前七頁。

- (35) 同前一五頁。

(36) 同前一九頁。

(37) 同前七五三頁。

(38) 同前七四九頁。

(39) 開催趣旨に関しては、信濃教育会は戦前から講演会・講習会を積極的に推進してきたので、その一環ではないかと思われる。前掲『信濃教育会九十年史』によれば、小学校令制定（一八八六年）、郡立高等小学校の一斉開校（八八年）、および教育学関連書の翻訳・流布、他方では日清戦争前の「実業教育論」の風靡にともない、講習会開催の機運が高まったことにより、一八九〇年以降、夏季講習会を開催してきた（一六六―一六八頁）。

(40) 同じ内容をもつ八月六日付の資料もあるが、おそらくこれは下書きであるため、本文では公式の文書と推定される八月八日付の本資料を紹介した。

(41) 丸山「中野好夫氏を語る」（一九八五年）『丸山眞男集』第十二巻（一九九六年）一六〇頁。同「森有正氏の思い出」（一九七九年）『丸山眞男集』第十一巻（一九九六年）八一―八二頁。森との交流のはじまりは、一九五〇年頃、南原繁（当時東大総長）が「学生問題の処理のため」に設置した「学生委員会」の場だったという。この委員会では中野も一緒だった。

なお、勝田守一（一九〇八―一九六九）との出会いについては、丸山のつぎの回想がある。「〔…〕ぼくが勝田さんと知り合ったのは、勝田さんが文部省の役人だったときで、清水幾太郎さんの二十世紀研究所でなんです」（前掲『定本丸山眞男回顧談』下、五二―五三頁）。雨田英一によれば、一九四七年、勝田と丸山は、敗戦後の社会科教育の方向性をめぐって接近しつつあった（雨田「戦後日本における民主化と教養・文化・教育をめぐる論議——丸山眞男を中心として」、前掲『20世紀日本における知識人と教養』二九―三二頁）。

(42) 文相経験者・安倍能成の講演も熱望されたようであるが、彼は、もともと岩波茂雄の友人として長野県関係者から歓迎される人物だった（当時の郷土誌、たとえば『信州及信州人』等参照）。また、信濃教育博物館所蔵資料「常任委員会記録 昭和二二年度（志巻） 信濃教育会」（綴）等所載の文書には、南原繁の招聘をたびたび検討、南原の多忙により講演が実現しない旨の記

述が見られる。

(43) 以下に翻刻するのは、信濃教育会各支部の報告書のうち、同会本会および各支部が推進した事業の全体像（一部省略）である。底本は信濃教育博物館所蔵の原資料。各支部の報告書は、「部会 10 20 21 22 23」と朱書きされた紙で包み、その上から紐で括った仕方で保存されている。この資料の束の中に、一九四七年度、四八年度の各支部の事業報告書がある。前者の各支部報告書は、同じ用紙（四〇〇字詰原稿用紙）におそらく同一人物が浄書し、一つに綴じられている（後述する一九四八年度の報告書は、部会ごとに用紙も筆跡も異なるそれが各々ホッチキスや紐で綴じられたもの）。

各支部の報告書は、当該年度の役員体制や予算執行状況、他県等への視察、研究会開催、さらに下部の支会主催事業など多岐にわたる事業内容を伝えている。各支部のこの報告書は本会からの要請をうけて作成されたものであることが、つぎの資料から推測される（各支部との連絡文書綴 昭和廿三年一月ヨリ、廿一年三月マデ 信濃教育会」所収の文書）。

〔昭和二十四年四月廿五日〕

信濃教育会

各支部会長殿

昭和二十三年度事業概要報告の件

標記に関し左記項目によって御報告願います。

報告期限 五月十日

記 ◎昭和二十四年度部会予算書一部御送附下

されたし

一、会員数及び役・職員氏名表

二、諸会合

一、総集会の概況 二、役員会、その他の会合回数 三、特殊の会合については内容を略記すること

三、講演会

期日、講師、講演題目等（支会・連合職員会主催のものも記載）

四、講習会

期日、講師、科目等（支部・連合職員会主催のものも記載）〔…〕

以下に翻刻したのは、さまざまな情報をふくむ各部会報告書のうち、当時の代表的な知識人が長野県を舞台に行き交っていたことを示す、総集会の招待講演（同時に定例化している会員演説は略記）、講演会、講習会の情報に限定した。翻刻にあたって極力書式を統一した。たとえば、講習会は演題を示している場合と科目のみを示している場合とがあるが、どちらも「」で示した。（ ）は原資料に記載の情報、〔 〕は筆者による補足を指す。

本稿で翻刻した一九四七度および四八年度の各部会報告書記載の講演会等の記録は、各部会（郡市教育会）がそれぞれの機会に刊行した後掲の図書の中にも重複する記載が見られる。各部会報告書の判読にあたって適宜参照した。ただし、なかには記載の情報がほとんど符合しないものがある。本文ではあえて右の手書きの文書を底本にしたが、符合しない情報が夥しい場合は注記した。なお、丸山に関する情報について矛盾する記述は見られなかった。

参考までに筆者が確認した各部会の沿革史関連書を以下に掲げる（順不同。すべて信濃教育博物館所蔵）。

松本市教育百年史刊行委員会編『松本市教育百年史』松本市教育百年史刊行委員会、一九七八年

松本市教育会沿革誌委員会編『松本市教育会八十五年沿革年表』松本市教育会、一九七〇年

上水内教育会史編集委員会編『上水内教育会史』上水内教育会、一九八九年

長野市教育会史編集委員会編『長野市教育会史』長野市教育会、一九九一年

下水内教育会編『八十年の歩み』下水内教育会、一九六七年

更級教育会百周年記念誌編集委員会編『更級教育会百年誌』更級教育会、一九八七年

埴科教育会史編集委員会編『埴科教育会史』埴科教育会史刊行会、一九六二年

上高井教育会百周年記念事業実行委員会記念誌部会『上高井教育のあゆ

み——百周年記念誌』上高井教育会、一九八五年

長野県下高井教育会百年史編集委員会編『長野県下高井教育会百年史』長野県下高井教育会百年史刊行委員会、一九七九年

北安曇教育会百年史編集委員会編『北安曇教育会百年史』北安曇野教育会、一九八五年

南安曇教育会百年誌編集委員会編『南安曇教育会百年誌』南安曇野教育会、一九八八年

上伊那教育会編『上伊那教育会沿革誌』上伊那教育会、一九六七年

上水内教育会史編集委員会編『上伊那教育会史』上伊那教育会、一九九三年

下伊那教育会教育資料部編『七十年史年表』下伊那教育会、一九五七年

下伊那教育会七十年史編『下伊那教育会七十年史』下伊那教育会、一九六〇年

木曾教育会百年誌編集委員会編『木曾教育会百年誌』木曾教育会、一九八六年

諏訪教育会沿革史委員会編『諏訪教育会百年の歩み』諏訪教育会、一九八二年

小泉上田教育会編『沿革年表（二〇年）』小泉上田教育会、二〇〇九年

佐久教育会五十周年記念誌委員会編『佐久教育会五十周年記念誌』佐久教育会、二〇一二年

(44) 前掲『上伊那教育会史』との間に異同が多い。

(45) 前掲『北安曇野教育会百年史』との間に異同が多い。

(46) 前掲『上水内教育会史』との間に異同が多い。

(47) 前掲『松本市教育会百年史』がより詳しい。

(48) 前掲『別集』第一巻、二八九頁。

(49) 前掲『別集』第一巻、三〇七—三二〇頁参照。

(50) 前掲『丸山眞男座談』第一冊、一五四—一五五頁。

(51) 長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第三巻（総説編三）、長野県教育史刊行会、一九八三年）八三六頁。

- (52) 前掲『上高井教育のあゆみ』二九〇頁。
- (53) 前掲『松本市教育会百年史』との間に異同が多い。
- (54) 前掲『上水内教育会史』との間に異同が多い。
- (55) 前掲『埴科教育会史』との間に異同が多い。
- (56) 本調査で新たに判明した丸山の評伝的事実のうち、一九五三年の講演「現代政治の様相」は、前掲『諏訪教育会百年の歩み』三〇五頁に記載がある。より詳しい日時や講演内容は不明。
- (57) 一九四九年度の部会報告書のうち確認できたのはこの更級部会のみである。言い換えると、この一部のみ、「部会 10 20 21 22 23」に束ねられていた。
- (58) 丸山文庫には、一九四六年に作成された、ルース・ベネディクト『菊と刀』についての詳細なメモ「菊と刀」英語原本の読書ノート、メモ」(資料番号339、全三二枚)が所蔵されている。
- (59) 前掲『丸山眞男座談』第一冊、一九四頁。
- (60) 前掲『別集』第一巻、四一四―四一六頁参照。
- (61) 松沢弘陽「丸山眞男における近・現代批判と伝統の問題」(大隅和雄・平石直昭編『思想史家丸山眞男論』ぺりかん社、二〇〇二年、登録番号0210133)は、丸山における近代化と現代化との二重の課題意識が更に戦前の論文「政治学に於ける国家の概念」(一九三六年)にまで遡ることを論じている(二七四―二七五頁参照)。
- (62) 『信濃木崎夏期大学百年誌』編纂委員会編『信濃木崎夏期大学百年誌』(北安曇教育会、二〇一六年、登録番号0210893)三五九頁。なお、同年度には他に、辰野隆、中野好夫、西尾実等も講義している。
- (63) 同前一二、三八二―三八三頁参照。
- (64) 『信濃木崎夏期大学物語』(長野県北安曇教育会編、信濃教育会出版部、一九七八年、登録番号028895)に、とくに深く関わった講師(宮沢俊義など)が詳しく紹介されている。
- (65) 『丸山眞男集』第四卷(一九九五年)二二七頁。
- (66) 知識人の「啓蒙」活動という点に力点を置くならば、ここに取り上げた人た

ちの農村観や民衆観といったこともまた、本稿と関連する研究課題に数えられるであろう。前者は、井上寿一『戦前昭和の国家構想』(講談社選書メチエ、二〇一二年)に丸山の認識・理解にたいする批判的評価が見られ、後者は、黒川みどり「丸山眞男における『精神の革命』と『大衆』」(赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』影書房、二〇一四年、登録番号0210821)が丸山を対象とした説得的な議論を展開している。

後記

本稿校正中、川路村での丸山講義(第一節参照)の情報を得た。『信濃路』第四号(一九四六年九月一〇日発行)六〇頁の「文化日誌 農文協だより」に、七月から八月にかけて県内各地で「夏期青年文化講座を開設した」旨の記事がある。講師・演題の一覧の中に「日本近代政治思想史 東京帝大助教授 丸山眞男」とある。日程との対応関係は明確でないが、八月五日には川路村で当該講座が開設された記述がある。上の情報ならびに資料の提供にあたりご高配賜った農文協の留場俊明氏・相澤啓一氏に深く感謝し上げる。